

レ魂消テ、則地ニモ倒ツベシ、サレドモ秀郷天下第一ノ大剛ノ者也ケレバ、更ニ一念モ不動ゼシテ、彼大蛇ノ背ノ上ヲ荒カニ踏テ、閑ニ上ヲゾ越タリケル、然レ共大蛇モ敢テ不驚、秀郷モ後ロヲ不顧シテ遙ニ行隔タリケル處ニ、怪ゲナル小男一人、忽然トシテ秀郷ガ前ニ來テ云ケルハ、我此橋ノ下ニ住事、已ニ二千餘年也、貴賤往來ノ人ヲ量リ見ルニ、今御邊程ニ剛ナル人未見、我ニ年來地ヲ爭フ敵有テ、動バ彼ガ爲ニ被惱、可然バ御邊我敵ヲ討テタビ候ヘト、懇ニコソ語ヒケレ、略下

〔風雅和歌集二十〕天祿元年、大嘗會悠紀方屏風の歌、近江國勢多の橋をよめる、兼盛

みつぎものたえずそなふる東路のせたの長はし音もとゞろに

〔夫木和歌抄二十一〕家集

兼盛

あはづの、あはですぐるはせたのはしこひてわたれと思ふなるべし

此歌はするがのかみに成て下けるに、あはづといふ所にやどりたるに、惠慶法師とひて侍返事と云々、

〔更科日記〕我ゐていきてみせよ、いふやうありとおほせられければ、かしこくおそろしく思ひけれど、さるべきにや有けむ、おひ奉りてくだるに、びんなく人をひてくらんとおもひて、その夜せたのはしのもとに、此宮をすへたてまつり、せたのはしを、ひとまばかりこぼちて、それをとびこして、このみやをかきおひ奉りて、七日七夜といふに、むさしの國にいきつきけり、略中みづ海のおもてはるぐとして、なでしま、竹生島などいふ所のみえたる、いとおもしろし、せたのはしみなくづれて、わたりわづらふ、

〔續古事談五〕晴明、大舍人ニテ、笠ヲキテ勢多橋ヲユクニ、慈光コレヲミテ、一道ノ達者ナラムズル事ヲシリテ、ソノヨシヲイヒケレバ、略下

〔日本紀略十三〕後一條、萬壽元年十一月廿三日丁未、是日、近江國勢田橋燒亡、